



地域調査士通信 No.9 2019.3

- ・巻頭のことば
「地域調査」の魅力とは 山下 清海 ・・・・ 1
- ・地域調査の現場（第9回）
地域とその関わりの中で 新保 正夫 ・・・・ 3
- ・地域調査士養成の取り組み（第5回）：
法政大学文学部地理学科地域調査力の修得へ向けた取り組み
小原 丈明 ・・・・ 6
- ・お知らせ
専門地域調査士の有効期限は10年です。更新の準備は大丈夫ですか！
三橋 浩志 ・・・・ 8

巻頭のことば

「地域調査」の魅力とは

(公社) 日本地理学会地域調査士認定委員会・委員、専門地域調査士
山下 清海 (立正大学・教授)

地域調査の魅力とは何だろうか。地理学の魅力、と言い換えてもよ
いだろう。大学の学部時代から40年あまり地理学を学び研究し、地域
調査に取り組んできた私にとって、地域調査の魅力は、出会いである。
これまで知らなかった地域、およびそこで生活する人々との出会いで
ある。

研究論文を書くときには、専門的な角度で特定の地域を深く掘り下
げるため、「余計なもの」を捨てざるを得ないことになる。しかし、地
域調査の過程では、多くの出会い、貴重な発見があり、またいくつも
の疑問も生まれてくる。よく知っている地域のつもりでも、新しい発
見の機会は常にある。

最近では、地理学の専門分化がますます進み、人文地理学と自然地理
学の溝も深まっている。大学入学後、地理学を専攻した私は、人文地理学、自然地理学のどちらにも興味が
あった。同学年の友人が、「俺は人文」、「僕は自然」と決めていく中で、私は学部2年生が終了するまで、敢
えて決めないように努めた。人文地理学、地形学、気候学、水文学の巡検を経験し、それぞれの分野に魅力
を感じていたからである。

地理学の強みは、やはり人文・自然、換言すれば文系・理系の両方に関心を持っていることではないだろ
うか。たとえ人文地理学が専門であっても、他の文系の人たちが苦手とする自然現象にもある程度の知識を
もっている。自然災害に関しては、自然地理学的知識だけでなく、人文地理学的知識も加えた総合的な視点
が重要となる。言うまでもなく、地図を読み、さまざまなデータを地図化するのも地理学の強みである。



地域調査で国内、海外を問わず、いろいろな地域を訪れることが重要である。なぜなら、さまざまな地域を比較することにより、新しい発見、斬新な研究のアイデアが生まれてくるからである。

勤務先に出張届を提出して出かけるだけが、地域調査ではない。日常生活で動き回ることも、地域調査の一環である。私はエスニック地理学を専門にしてきたが、毎日のように新しい出会いがあり、発見がある。例を示そう。

最近、「台湾料理」の看板を掲げた中国料理店をよく目にする。メニューには必ず台湾ラーメンがあり、ボリュームが多く、低料金のセットメニューが豊富である。しかし、経営しているのは、台湾人でなく、中国大陸（特に東北地方）出身者である。その理由を中国人に尋ねると、「日本人って、中国大陸より台湾の方が好きでしょう！」との答え。同様に、日本各地で急増しているのが、「インド料理」、「インド・ネパール料理」の店。経営者はインド人ではなくネパール人である。では、看板に、なぜ「インド」が入るのか。

これらの謎は、簡単である。海外では、日本料理店の多くは、中国人、韓国人、ベトナム人など非日本人の経営である。マイナーなエスニック集団が、よりメジャーな集団の姿を借用する適応戦略を、私は「借り傘戦略」と名付けた。国内外を歩き回っていると、「これって、どこかで見た」というような現象に気づくことがよくある。

もう一つ、私の体験を紹介したい。1984年7月～8月、中国の甘粛省蘭州を訪問した。当時、筆者は秋田大学教育学部の地理学講師であったが、秋田市と姉妹都市である蘭州市の交流を深める秋田市短期文化研修生（5名）として、シルクロード地帯の主要都市、蘭州において2週間ほど、各地をフィールドワークすることができた。

私が初めて中国を訪れたのは1978年の夏、改革開放政策が始まる前であった。中国人民は皆、貧しく、表情は暗かった。それ以来、2回目の訪中であったが、改革開放政策が始まって間もない中国の実情を「何でも見てやろう」の心意気で蘭州に出発した。

黄土高原の西端、黄河の河岸に位置する蘭州を、私は、自然、経済、社会、文化、歴史などの多角的な側面から見ることにした。事前に蘭州市人民政府（日本の市役所に相当）に、人民公社を訪れ農民と交流したい、少数民族の回族の生活を知りたい、蘭州大学を訪問したい、黄河上流の劉家峡ダムや炳靈寺（へいれいじ）石窟に行きたい、敦煌莫高窟（甘粛省内にあり、甘粛省と秋田県は友好提携を結んでいる）を見学したい、などの要望を伝えていたが、幸いにも蘭州市人民政府は、すべての要望を受け入れてくれた。

蘭州空港に到着し、蘭州の中心部に向かう途中、黄土の丘陵の崖に人工的な洞穴がいくつも見られた。蘭州市人民政府の担当者に聞くと、「あの洞穴には農作業で使う道具を保管しているんだ」、「畑からメロンを盗んでいく者が時々いるので、監視人が夜、洞穴で見張っているんだ」などの説明があった。筆者にとっては、いずれも納得しがたい説明だった。

蘭州は「瓜果城」（メロン都市）として、中国では有名である。「白蘭瓜」、「蘭州蜜瓜」と呼ばれる良質のハネデューメロンの産地である。半乾燥地帯で日照量が豊富で、昼夜の温度差が大きい蘭州の気候条件は、良質メロンの栽培に適していた。メロン畑を見学していると畑の表面に小石が敷き詰められていた。付き添ってきた蘭州市人民政府の幾人かの担当者にその理由を尋ねると、そんなこと興味ないとばかりに、「不知道」（わかりません）との返事。日本から持ってきたメジャーで畑の表面の小石の大きさを測ると、長径が最大約10cmのものまで大小さまざまであった。その後、農民や蘭州大学の研究者などへの聞き取りを重ねた結果、疑問がしだいに解けてきた。土の表面に礫を敷き詰めた畑を「砂田」という。砂田の利点は、保水や保温の効果が優れている。土壌の乾燥を抑制するため、土中の塩分の地表への上昇を抑え、塩害防止の効果もあるという。また、黄土の流出も防いでいるという。筆者は、帰国後書いた論文の中で、「近い将来、砂田はビニール・マルチ農法にとって代わるものと思われる」と書いた（注参照）。

話がここで終わらないのが地理学の地域調査である。

砂田の最大の難点は、それを造成するため礫の運搬に多くの労力を要することであった。この作業は農閑期に行われる。では、砂田を造成するための礫は、どこから持ってくるのか。黄土高原の蘭州において、礫層がみられる場所は非常に限定されている。蘭州空港から蘭州中心部に向かう際に私が気になった洞穴こそが、砂田を造成するための礫を採取した洞穴（現地では「山洞」と呼ぶ）であったのだ。

地域調査では、謎を発見し、謎を解くことの連続である。その経験の蓄積により、他の人が気づかない新たな謎も発見することができる。その繰り返しこそが、地域調査のさらなる魅力ではないだろうか。

注：山下清海（1987）：中国甘肅省蘭州の地誌学的考察—黄土高原、黄河上流の都市の地域性—。

秋田大学教育学部研究紀要人文科学・社会科学，第37集，101-114。 <http://wp.me/a8HHYI-pc>

地域調査の現場（第9回）

地域とその関わりの中で

しんぼ

新保 正夫（前橋市役所・専門地域調査士）

職業人は、「分野に生きる人」と「地域に生きる人」のふたつに大別されると考えている。

筆者は群馬県前橋市役所の事務職員として25年余りを過ごしてきた。10代から地図と鉄道に親しみ、同じような対象に興味を持つ仲間や、熱意のある地理の諸先生と出会いながら、大学は文学部史学科の地理学教室に進学した。当初は、文学部という潰しの効かない専攻を選んだことに戸惑いを覚えていた。しかしながら、地方公共団体の一般職として多くのときを過ごし、前橋市という特定の地域と関わりの中で、地理学や地域調査は、応用範囲の広い基礎的な学術領域であった、と実感している。地域を総合的に捉える能力と、時には専門性を発揮できる能力、両者のバランス感覚が涵養されることで、職業人として充実した日々が送れるものと信じている。

今回、地域調査士通信の「地域の現場」を執筆する機会を頂くに至り、専門性を切り取ってテーマとするには、前号までの諸先生の論述には到底及ばない。本稿では、地理学を専攻した地域調査士にはこんな仕事ぶりもあるのか、という内容を中心に記してみたい。これから職業を選択する学生や、就職して間もない皆さんなどが気楽に目を通しながら、何らかの気づきを感じてもらえれば幸甚である。

（1）地域に学ぶ

1993年、入職して最初の配属先は、国民健康保険の担当課であった。始まったばかりの電算システムの開発に追われ、複雑化する給付事務、受け皿でしかない資格認定に違和感を覚えながら、窓口でのハードクレームに日々対応した。国保新聞に連載される鎌倉市の担当課長のコラムを楽しみに読んでいた。庁内業務ばかりだったが、卒論作成で石川県の清酒醸造元を巡った魂からか、現場に出たくなる。医療事務を扱っていたため精神病院の立地特性に興味を示し、休日は折に触れて見て回った。4年後、農政課に異動し、森林担当を拝命する。当時は広域圏の町村を合併する前であり森林面積も300ha弱と限られていたが、篠藪を切って山林を巡り、現況を地図に落とし古地図を探して土地利用の変遷をあたっていた。森林組合の合併にも携わり、当時の組合長が祝辞で「二つの団体が結婚することとなりました」と述べたのが印象的で、その後、いわゆる平成の大合併が進む。

一方、入職8年目に地元の大学で大学院が開講し、社会人入学への道が開かれる。学生時代から存じていた地元出身の地理学者、戸所隆先生の研究室の門を叩いた。地域政策学科に属し、修士課程では前橋市と高崎市の合併の可能性を探った。その後、仕事では群馬県の農政課へ派遣され、構造改革特区の申請に携わり、その経過を学業にも活かした。



また、食と農とまちづくりというテーマも扱った。県から戻って市民税課に配属された頃から、社会人として得た業務の知識を自分なりに論文に残していこう、という考えが定着してきた。逆に、論文に書かねばという視点からも、仕事を俯瞰したり掘り下げたりしていく意識が芽生えていた。事象の認知や政策の形成過程には、図1のようなモデルを常に念頭に置いた。その根底には、地域の現場をしっかり調査するという、地理学の基本的なスタンスが染みついていたのである。

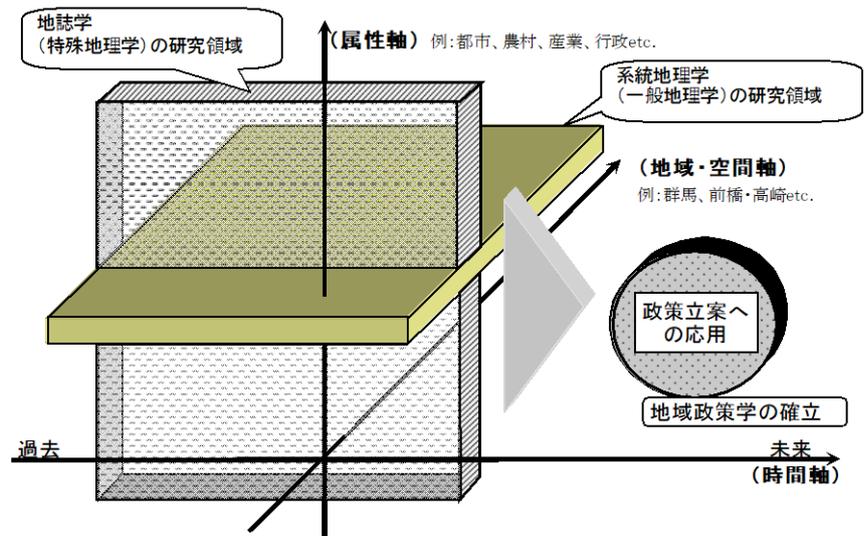


図1 モデル図 (筆者作成, 2006年)

(2) 専門的知識の活用 ～地域公共交通の見直し

学位論文に着手する頃から、長い間興味の対象としてきた公共交通を扱うテーマを手がけることが多くなり、相互乗り入れやDMVなどに着目した。2008年には交通対策室に異動して7年間交通畑を歩むこととなる。前半は、運転免許返納の促進・優遇制度を立ち上げたり、公共交通マスタープランの策定や新規バス路線の開設に携わったりと、足し算の政策に邁進した。マスタープランでは、市内バス路線の利用状況の悉皆調査や住民意識の調査を行う。また、バスの再編成では、乗合路線運行から乗合区域運行(前橋市ではデマンドバス)への変更に取り組むなど、地域調査の実施や地域の合意形成過程を知る上で、これまで重ねてきた知識や研究が大いに役に立った。

他方で、後半の3年間は、政治と政策の密接性と不可解さ、民意の転換の恐ろしさに触れることになる。保守同士が争う首長選挙では、現行政権とは異なる公約がクローズアップされる。旧町村部で一定の成果を収めていたデマンドバスを、いつでもどこでも運賃200円で実施するという市民と約束が、政策課題として降りかかってきた。執心して策定した公共交通マスタープランは陰が薄くなった。反対するタクシー業界と長い期間すり合わせ、平行して何度も社会実験を重ねる中で、登録者に対してタクシーチケットを交付するという制度(マイタク)で一旦は結実する。市の財政負担が見込みより増えたり、事務作業が予想以上に膨大となるなどの宿題を置いて交通を去ることとなったが、それまで地域公共交通として活用されてこなかったタクシーを、地域の足の担い手として位置づけ、活用の道を開いたという点で結果が残せたと考えている。

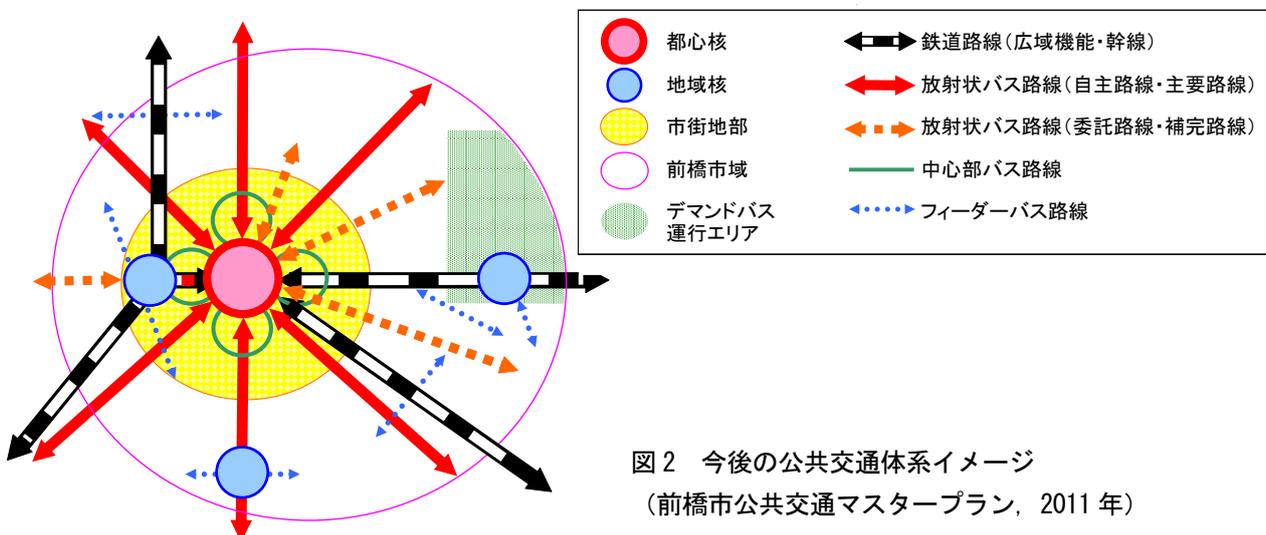


図2 今後の公共交通体系イメージ (前橋市公共交通マスタープラン, 2011年)

また、コンパクトなまちづくりを研究テーマとしてきた中で、安易な均一運賃（協議運賃）の導入は最小限にとどめ、対距離運賃制を堅持できたこと、前橋駅を中心とするハブ&スポーク状の路線構造を公共交通マスタープランの中で位置づけ（図2）、定められたことには、担当として安堵している。これまでの研究の蓄積がなければ、周囲のいわゆる大きな声を優先して、翻意してしまったかもしれない。

（3）総合的な見識を磨く ～開館5年目のアーツ前橋（美術館）

現在、ともに仕事をする学芸員は、その道（美術の専門分野）で仕事をしているという認識に立つ。筆者は学芸員の必要単位を取得していたが、美術館は縁遠い存在で、作品を展示してその美しさに耽ったり、美術の技法を研究して紹介する空間、という認識が精々であった。未だ美術界の専門性に踏み入る余裕はない。ところが、アーツ前橋が主力で扱う現代美術は、地域社会との関わりなしに成立しえない表現を基礎としていた。新しい刺激は、4年目の今でも感じ続けている。

当館は今年度、地域創造大賞（総務大臣賞）を受賞した（写真1）。評価点は“まちなか美術館”として地域再生を牽引したこと、である。中心商業地の立地特性を活かし、アートを媒介してまちと繋がる手法は、美術館の真骨頂である。地域アートプロジェクトにおける滞在制作事業では、アーティストがまちに住み、調査し、人々と交流した。昨年10月の「つまづく石の縁」は、複数の空き店舗を活用し、開館前から温めてきた滞在制作20名の成果を一斉に展覧した。全国数多の地域で芸術祭が行われているが「滞在制作、中心市街地」を主題にした前橋オリジナル版を、世に発信する絶好の機会となった。そのほか、福祉・医療・教育団体とアーティストが継続的に関わる「表現の森」など、個性的、かつ公立美術館が担う役割を示唆するような取組が続けられている。



写真1 地域創造大賞授賞式
（筆者撮影、2019年）

ここで特筆すべきは、作品を制作するにあたり、アーティストと当館の学芸員は「リサーチ」と称して、事前の地域調査を必ず行っている。市民の多くが気がついていない、地域の伝統や文化、特徴を見事に切り出して、アーティスト独自の表現を加えて作品化している。多くの人が地域の価値に気づいてほしいと思う。

また、地域作家の作品収蔵は、シビックプライドの醸成に繋がる。収蔵美術品は市民に対する将来の贈物であり、美術館は未来にバトンタッチする作品を選んでその価値を高めていく役割を担う。先人は孫の顔を思い浮かべて植林した。今の子供が大人になったとき、美術館があってよかったと思えるようにしたい。一方で現状は、人材（雇用・労務管理）、予算（収支）など組織としての課題が山積している。地理学に通じて来た筆者としては、アーツ前橋が地域づくりを文化面からも支えている意義を強調し、地域をマネジメントする市役所全体から見渡すなかで、今ある館の輝きが褪せることがないよう、組織改善の見通しをつけていきたいと考えている。そこに携わる学芸員ほか職員は、専門性のみならず、市役所職員であるからには、総合的な見識と行動力を具備する人材として、公立美術館が地域に根差すよう努めなければならない。

（4）市民活動の実践 ～やはり、鉄道やバスが好きで

筆者は、中央前橋駅と西桐生駅を結ぶ上毛電気鉄道（上電）に対して、上電友の会の設立や運営に市民活動で関わっている。現在9年目、会員は120名余、運営のキーマンには、大学の先生や高校、大学のOB仲間、職場関係の有志が集っている。3月中は、友の会が主催するスタンプラリーを実施中で、上電（前橋市）、北陸鉄道（金沢市）、アルピコ交通（松本市）を巡る。ほか、鉄道×テクノのSUPER BELL'Zには上電の楽曲をリリースしていただき、上電主催のイベントにも年1回ほど出演がある。

大学の地理学教室は、鉄道と山をこよなく愛するメンバーで溢れていた。よろしければご参加ください。

地域調査士養成の取り組み（第5回）

地域調査士養成における現状と課題、苦悩

—法政大学文学部地理学科の事例—

小原 文明（法政大学・資格専門委員）

法政大学文学部地理学科（定員99名）では、毎年度、100名前後の卒業生を世に送り出している。多くの者が民間企業や公務員、教員の職に就いているが、地理学を学んで得られた知識や能力が直接的に関わる職に就いている者は、それほど多くはないかと思われる。ただし、地理学における知識や思考、モノの見方、各種調査のコツ、図表を用いての効果的な表現、適切なプレゼンテーションや質疑応答、論理的な文章の執筆など地理学を学ぶことで修得できるさまざまな知識・能力は、それぞれの職において少なくとも間接的に、そして仕事を遂行する上での基盤として確実に役立つと考えられる。これらの知識・能力の修得は地域調査士の資格と密接に関わっていることから、本学科においても資格取得を推奨している。ただし、本学科の教員として、そして本制度に関わる資格専門委員の立場で見ると、本学での取り組みはなかなか期待する成果が出ていないのが現状である。本稿では、本学科における地域調査士養成の取り組みの概要を説明した上で、現状の課題に関する要因について考えてみたい。

カリキュラムおよび授業における配慮

本学科はその名の通り地理学を専門に学ぶ学科であることから、そのカリキュラムは必然的に地域調査士制度に沿う形となっている。先に記したように、本学科では地域調査士の資格取得を推奨していることから、希望学生が同資格を取得しやすくするようにカリキュラムの上で配慮している。具体的には、卒業に必要な必修科目を地域調査士の資格取得に関わる科目に配置することで、同資格の取得を促している。具体的には、「a. 地域の概念を扱う科目」には「地理学概論(2)」(1年生～)、「c. 地域の自然的特性を扱う科目」には「地理学概論(1)」(1年生～)、「f. フィールドワーク」には「現地研究」(2年生～)、そして「g. 地域に関する卒業論文の作成若しくは地域調査に関する卒業研究」には「卒業論文」(4年生)を配置しており、選択必修科目あるいは選択科目として取得が必要であるのはb・d・eの項目の科目にすぎない。

また、1年生向けの必修科目である「地理実習(1)」において、地域調査の心構えや考え方、方法論の概要について解説ならびに簡単な実習を行っている。この科目は地域調査士の資格取得に関わる科目ではないが、地理学を4年間学ぶ上でのベースとなる科目であると同時に、地域調査士の資格取得に関わる科目における知識や方法論、心構え・考え方の修得に繋がる科目といえる。換言すれば、本学科における地域調査士養成のベースに位置づけられる科目であり、その科目を必修科目として初年次に配置している点も、地域調査士の養成を配慮している点として挙げられる。

フィールドワークに関わる科目および指導内容

先述の「地理実習(1)」以外に、本学科におけるフィールドワークに関わる科目としては、各教員によるゼミナール科目（「自然地理学演習(1)」～「同(3)」、「人文地理学演習(1)」～「同(5)」）と「現地研究」が挙げられる。前者のゼミナール科目は卒論を指導する教員全員が担当するものである。そのため、卒論指導の側面を有する科目であり、それぞれの卒論生のフィールドワークについて個別に指導を行う一方、この科目は3年生も受講できるため、その3年生向けに各教員の専門分野に関するフィールドワークの方法を指導する側面も有する。この科目でのフィールドワークに関する指導方法は教員ごとに差異はあるが、多くの教員はグループ単位でのフィールドワーク（グループワーク）を実践させている。例えば、筆者の場合は、年度の初めに4、5個の研究テーマを受講生と相談の上で設定し、それらのテーマについて4、5人のグループ単位で1年を掛けて研究を行わせている。その際、聞き取り調査やアンケート調査、観察調査、観測調査

など必ず現場における何らかのフィールドワークを伴う研究テーマを設けるようにし、それらフィールドワークの方法を実践的に学ばせるようにしている。また、フィールドワーク全体に関わる作法（アポイントの取り方や調査対象者に対する御礼等）や注意点（安全管理や調査公害等）、既存研究のフィールドワークの具体例を素材とした方法論の検討なども行うことで、個別のフィールドワークだけでなく、フィールドワーク全般への理解を高めるようにしている。

上述の通り、本学科においては、「現地研究」が地域調査士の資格取得に関わる「f. フィールドワーク」に該当する科目である。本科目は、毎年度、各教員がテーマおよび調査対象地、実施時期を決めて1、2コース（学科全体で年間12コース程度）を設定し、2年生以上の学生が関心に応じて、各コースの募集にエントリーする形式である。学生は在学中に最低2回は参加し、各コースの課題を完遂しなければ卒業することはできない。各コースはそれぞれの担当教員が教育効果等を考慮して設定するが、毎回異なるテーマ・対象地で実施する者、定期的に同じ対象地で行う者など調査対象地・内容はさまざまである。教員によって実施方法等には若干の差異はあるが、ひとつの現地研究は、基本的には複数回の事前学習（フィールドワークの概説、調査内容の詳細な検討、調査の事前準備等）と2泊3日（場合によってはそれ以上）の現地におけるフィールドワークの実施、事後学習（調査データの分析、調査結果のプレゼンテーション、報告書の作成等）で構成される。また、本学科では実施体制・内容や安全性の確保等に関する詳細なルール（現地研究に関する内規）を定めており、各教員はそれに基づいてコースを設計している。さらに、学科主任と現地研究委員の教員が実施内容や安全面をチェックするとともに、学科会議にて教員全員で検討をし、承認を得たものでないと実施することはできない。このようにして、現地研究の内容および安全面について担保している。

本学科における地域調査士養成の成果の実情とその意味

表1は本学科における地域調査士講習会の受講者数および地域調査士資格の取得者数を示している。毎年度、10名程度が講習会を受講し、数名が資格を取得しているにすぎない状況が続いており、本学科における地域調査士養成の成果は芳しくない。果たして、この現状は何に起因するのか、自省を込めて考えてみたい。

第1に、本学科における取り組みの不十分さがあると考えられる。もちろん、学生には各種ガイダンスや栞等の学科案内にて本資格制度について周知し、資格取得を働き掛けているとともに、学会から講習会の案内が届いた際には掲示をし、広報を行っている。また、各教員が授業等で個別に案内を行うようにしているが、この点については教員間で意識および取り組みの差は大きく、残念ながら、本資格制度への理解・対応にバラツキが見られるのが実情である。

第2に、本資格に対する学生の理解や捉え方の面が指摘できよう。これまでに多くの学生から本資格制度について話を聞いたところ、就職活動時においてそれほどの必要性を感じていないとの意見が多かった。これは本資格制度が就職活動時に役立つという意を意味しているのではなく、本資格を取得（取得見込み）していなくても、内定を手にすることができている現状を反映している。もちろん、冒頭で記したように、本資格を取得する際に修得する知識・能力は実際に働く中で活かされるものが多く、単純に就職活動時に有利に働くための資格ではない。この点に関する学生の理解が不十分であるのと同時に、われわれ教員がその意味・意義を十分には伝えきれていない点を反省し、改善する必要がある。

以上、本資格制度を本学科の学生にとって有効に活用する方法を考える目的で、本学科における現状の課題を提示した。同時に、これらの課題の中にはそれぞれの大学において共通する点もあろうかと推察される。各大学で、あるいは大学間で連携してこれらの課題を克服する契機となれば幸いである。

表1 法政大学文学部地理学科における地域調査士養成の実績

人数	年度								計
	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018		
講習会受講者数	11	16	13	9	12	12	4	77	
資格取得者数	0	1	8	6	3	3	2	23	

資料：日本地理学会資格専門委員会提供資料より筆者作成

お知らせ

専門地域調査士の有効期限は10年です。更新の準備は大丈夫ですか！

専門地域調査士の有効期限は10年です。10年目には資格を更新する必要があります。最初の認定者（2010年9月6日）は2020年9月6日が有効期限になるなど、今後、認定日に応じて更新が必要となります。

資格を更新するには、①更新講習会を受講するか、②10年間の活動実績を報告するか、のいずれかを満たすことが条件となります。更新の2つのルートについて、以下に説明します。有効期限までに各ケースのいずれかで対応できるように、準備を進めておいてください。

① 講習会を受講して更新するケース

10年目を迎えるまでに、専門地域調査士の更新講習会を受講してください。更新講習会は、専門地域調査士認定講習会と併行して実施します。1年に1回しか実施されていないので、スケジュールを確認ください。更新講習会の内容は、10年間の地域調査を取り巻く変化を中心とします（「心構え」、「法令（事例研究）」、「個人情報保護（事例研究）」、「人権（事例研究）」の4講座）。

② 地域調査に関する活動実績を報告して更新するケース

- 10年間の地域調査に関する活動実績を報告してください。活動実績は以下の「いずれか」とします。
- a) 学会等の大会や集会で、地域調査に関する研究成果等の発表や報告等を2回以上行っていること
 - b) 学術誌などの書誌に地域調査に関する論文や報告等を執筆して掲載されていること

「いつ10年の有効期限が切れるのか？」は、公益社団法人日本地理学会の専門地域調査士リストで認定日を各自ご確認ください。そして、計画的に更新手続きを進めることができるように、準備をお願いします。活動実績報告書などの関連書式は、順次ホームページに掲載する予定です。ホームページをご確認、よろしくをお願いします。

三橋 浩志（文部科学省・資格専門委員）

【お問い合わせ先】 公益社団法人 日本地理学会 資格専門委員会（目黒分室：資格制度事務局）

〒153-8522 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センタービル内

電話・ファックス 03-6416-8683 E-mail meguro@ajg-certi.jp

※2019年度の開室曜日は、4月以降に資格専門委員会ホームページに掲載します

【編集後記】

2018年の春に資格専門委員に就任し、ようやく仕事に慣れてきたところでしたが、地域調査士通信の編集ではまたもや解らないことばかり。委員のみなさまのご助力によって、なんとか誌面をつくることができました。本号にご寄稿いただいた先生方には、お忙しい折にもかかわらず、原稿執筆の依頼にご快諾いただき、たいへん貴重なご経験をご紹介いただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

（第9号編集担当・佐々木 明彦）

公益社団法人 日本地理学会 「地域調査士通信」第9号

発行日：2019年3月15日

編集・発行：公益社団法人 日本地理学会 資格専門委員会

印刷：一般財団法人日本地図センター

住所：〒153-8522 東京都目黒区青葉台4-9-6

電話番号：03-6416-8683